



本年2月の生名橋の開通に伴い同5月から弓削・生名間航路が廃止されていた尾道直行便ホワイト・ドルフィンが、約半年間のプランクをへて9月25日、ふたたび尾道直行便として弓削への寄港を果たしました。

この航路は本土の病院に通う人々の、いわば命綱としての役目を果たしてきたことを今年の弓削通信フォニックス2月号にも書きました。

上島町の公共交通、その中でも船便に関しては、新町になってなぜかすっきりしない施策が続き、その一方で町民の不便や不安に行政はしつかり向き合おうとしてきませんでした。

町民の願いに向き合わなかった行政。だから我らは動いた

この補償金(をもらわないからと言うのが理事者の説明でしたが、実際は補償金を受けているのです。申請すればもらえるものをもらわない筈がない。

☆橋が万能でないとは
 県も重々承知

愛媛県の説明によれば架橋後2年以内に、架橋による影響で船舶運行事業を変更する場合は何度でも交付金申請を受け付ける(もうらう場合でも返す場合でも)という。なぜそういう制度にしたかといえば、交付金申請が一度きりだと、業者は存続の工夫や努力するよりも一挙に止めることに向かっしまい、結果的に地域住民の交通手段を奪ってしまう恐れがあるからだそう。

ホワイト・ドルフィンが帰ってきた!



2011/09/25

☆お粗末すぎる船舶行政
 船舶に関する施策で最初に問題になったのは、公営生名渡船の第3セクター化。当初は経費削減を目的に第3セクターすることになったのが、いよいよ実施段階になったところ法的に出来ないという理由で急遽取りやめになり現在の公営に。その法的理由もさりながら、当初目的の町財政健全化への取り組みがぶっ飛んだことに議会も知らぬ顔の半兵衛です。

次に問題なのはそれを機に公営渡船の運行に民間業者に自家船を持ち込んでの参入をさせ、年5千万円の公費投入という事態。これは誰が考えても首をかしげざるを得ないでしょう。

公営渡船に民間業者を参入させる前提が、その業者が架橋に際し事業計画変更(俗に言うところの補償金)をもらわないからと言うのが理事者の説明でしたが、実際は補償金を受けているのです。申請すればもらえるものをもらわない筈がない。

者増を回り、フェスパや他の商産業の活性化が期待できること、

・町外からの利用者増とは観光開発に他ならず、航路復帰請願書に連署した町内あるいは外部のNPO、住民が力を合わせれば観光開発への取り組みも可能で、業者も応援に応える意志を示したこと、

・などの理由でNPO法人「頼れるふるさとネット」は交付金返還の肩代わりをはじめ弓削・尾道直行便永続に向け側面から応援することに取り組む決断をしました。

☆NPOの使命とは
 本来は行政に取り組んでもらうべき作業です。しかし航路廃

うです。つまり架橋に伴い海上交通が急激な変化に晒されないようにとの配慮です。

☆なぜ尾道直行便が大事な
 ホワイトドルフィンの復活には、船会社がすでに受理していた交付金(補償金)の愛媛県への返還が必要となり、航路復活を業者に求めるからには誰がそれを果たすかが課題でした。

いままでのいきさつから行政にはそういう視点から業者と話し合う気がなかったたので、我々が業者と膝を交えて話し合った結果、

・地元の復活要望が本物であれば業者も責任を果たしたいという意向を示されたこと、

・いよいよとなれば我々でとりあえず交付金返還の肩代わりができること、

・町の将来と町民にとって航路復帰をてこに町外からの利用

止前後からの町理事者の発言には、自ら歩み寄る気のないことに加え、年数千万円の予算を付けて別の参入業者を探すというようなものまであり、もしそういう事態になれば結局ツケは町民が払うこととなります。

NPO(特定非営利活動)とは行政の隙間を埋めるのが仕事の一つであり、その活動に公益性が求められます。

このたび我々のしたことは民間同士が相談し、廃止された航路の復活を果たしたにすぎませんが別の見方をすれば、住民が住民の力で自分たちの安心を守



きんぐち(十七)

青木喜代子

九月は大型台風が続けて上陸しノロノロ十二号は因島を直撃と覚悟していたら、雨風もひどくなくほっとしたけど各地に大きな被害をもたらした。とても他人事とは思えない。

何年も前のことだけど、大型台風の接近と大潮が重なり、海抜ゼロメートル地帯の我が家は床下浸水の被害にあつた。強風に加え停電となり心配でラジオをつければテレビの音声で、「台風はごろんの位置を北上云々」ラジオはごろんになれん!と悪態をつきスイッチを切つた。

電気が通じないというのは何も出来ない痛感。ローソクの灯りの中で「ヒマですね」「コーヒーでもいれますか?」と。少ししていやな予感があるので店に続く戸を開けると、なんとサンダルが三和土の上を浮いている。これには脳天気夫婦もたまげた。



夜光虫

も大雨を降らした。富良野からは「相当の雨が降っています。畑の土が流されています。これから農家は大変ですがお天道様には逆らえません!」とメールが届いた。

本当にそう思う。お天道様のご機嫌を伺いながら作った米が、野菜が出荷できずにいる東日本の農家の人たちの事を思うと、切ない秋である。

活動とも言えます。そういう意味からも復活成ったホワイトドルフィン、経営の厳しさを乗り越えられるか、生かすも殺すも利用者住民次第です。

船会社への復活申請書には町内7団体が連署、計1200人近く一般の人の署名も添えました。この町を牽引してゆくのは行政だけではないことを改めて感じます。どうか今までも増してホワイト・ドルフィンを利用して頂きたいというのが、復活に力を注いだ者の偽らざる思いです。

平山和昭



地域の魅力 若者の知恵と努力を生かしたい

すこいぞ、弓削高校生！

地域の観光プロランを競う「全国高校生観光甲子園」で地元弓削の生徒が優秀作品賞に輝いたニュース(愛媛新聞九月二十九日付)をみて感心した。このところあれこれと甲子園だが、俳句甲子園でも弓削高校生は話題になり、離島甲子園(中学野球)でも我が町の中学チームが優勝するなど、明るい話題が続いている。

今月号フエニックスA面の関わりになるが、離島の不便さを補う尾道直航便船も、民間業者である以上収益が確保出来なければいざい撤退の動きが再燃する。弓削へ尾道直航便を離島の人々の、ことに高齢者の医者通いの手段だととらえるのは正しいが、それは一面だ。航路存続のためには、本土からこの地へ「船に乗って来て貰う」ことがさらに大切になるのは誰もが承知だろう。

島の魅力、船旅の魅力

島の魅力は島外の人が決める。そういう視点からすれば観光客誘致は最大の眼目。船で来る途中に次々現れる景観をページをめくるように楽しんでもらう仕掛けや、この高校生達が考えたように、観光客と関係施設を仲介するプロモーション会社を設立し、いろいろなプランを提供することは、実は待ったなしの急いで取りかからねばならぬ事々だ。

生徒や学生が「町づくり」に参加できる仕組みをつくらう

観光とは言わば遊び。遊び盛りの人に楽しめるプランを立てて貰うのも方法だ。もちろん遊び盛りとは子どもから熟年まで幅広い。

人任せにせず地域一丸でいわずもがなだが、プランだけでは仕事は出来ない。実働する組織、資金、人、それらが程よく噛み合っただけの事業だ。

役所中心で専門のコンサル会社に調査研究を発注、それによって事業展開というのが常套だった。しかし、我が町にあってはそれで上手く開発できた試しはない。結局お金はコンサルに吸われ、建設業界に流れ、集客の出来ない施設や仕組みが残るだけ。成果が上がらずとも誰も責任はとらない、だった。

インターネットや様々な情報収集手段の普遍化のお陰で、生徒・学生でも立派に計画や企画ができることを、こうしてまたあたりに見せて貰うと、その人達にこそ資金を回し、住民にも

自分たちの力で町の魅力を再発見したり作り上げることは出来るのだと、勇気づけられる想いがする。そうだ。一日も早く「弓削へ行けばおもしろいぞ！」とやらねばならぬ。

自分にも出来る協力で瀬戸内クルージングの弓削寄港復活が成った今、その実現に向けて協力しあった町内のNPOや団体、個人、そして当の運航会社を交えての連絡協議会が発足した。町の魅力を町の人が横の連携を強めて作り上げてゆく嚆矢になるだろう。

求めるだけでなく提供する。町へ来てくれる人の立場に立つた色々な見直しが必要になる。行政マンも良い加減には目を醒ましてほしい。

今は小さな組織だが多くの知恵と実働力の集まる組織に育つてたい。それが結果的に尾道直航便の永続につながる。高齢者の安心にもつながることだから。平山和昭



古代出雲歴史博物館

9月下旬、思い立って出雲へ小さな旅をしてきた。弓削からだと片道4時間ちょっと。日帰り可能。

この博物館、撮影も触りもありでなかなか楽しい。いにしえの人々のたくましさ、独創力、そして、気宇壮大がすばらしい。写真は創建時の出雲大社の模型



尾道直航便 新浜港待合所から JA 病院行きバス有り

これもまた思い立って復活った尾道直航便を使ってJA尾道総合病院へ行って来た。バス路線を使っただけの経路探索。

病院が高台に移設したため尾道港のひとつ手前の新浜港からの路線バスの状況を知りたかったからだが、

10月1日より、弓削港発7時47分のみ、ホワイト・ドルフィンに乗れば新浜港の船待合所近くまで路線バスが来てくれる。

【行き】ドルフィン：08時38分新浜着 尾道バス08時45分発
【帰り】尾道バス：13時57分JA病院発 14時07分新浜着
ドルフィン：15時30分尾道駅前発 15時36分新浜着

もちろん尾道まで出ればちょっとした買い物もできる。復活なった船便に対するバス会社の粋な計らいとみた。

病院行きは、尾道駅前②番乗り場から平均30分に1本ある。

風天の入道雲

安藤朋生 茨城県



ここ数年、巨大な入道雲を見ていないように思う。入道雲、雷雲ともいう積乱雲。この時期の茨城は雷雨が多い。と言っても茨城全土ではないだろうが雷雨を伴うなら入道雲が出ていいはずなのに、どうしたことかムクムクしているだけでなんともワクワク感に欠ける有様。

このムクムクがつまりは積乱雲なのだがムクムク程度の話をしてるのではない。もうそれはそれはアレを見たらすぐ家に帰ってへそを隠せと、死んだば一ちゃんが言ったくらいのスーパービックサイズの積乱雲のことである。確かに子供の頃よりか雷雨は少なくなった。お陰で近所の川が増水して床下だの床

上だのな心配はなくなったけども。

子供の頃に見た入道雲は本当に立派なものだった。子供だったから大きく見えたのか父の背中みたいなものなのか、いやいやこれは間違いなく温暖化による気候変動に違いない。季節はどんどんズレてきているというではないか。四季がなくなり熱



帯の樹木がわんざり育ち、晩の食卓にピラニアが並ぶことも普通になるかもしれない。主食はバナナに昆虫は巨大に。日本の四季も気候変動には勝てるはずもなく、美しい紅葉も凍るはずの滝も今になくなってしまおうではと心配になる。

震災前のストップザ温暖化対

策は個々の意識の低くさが結果を得にくいものにしたが、震災の影響もありどこに行っても節電中。節電を要求される企業には、それなりのペナルティが課せられるともあり必死な部分もある。電力量の多い時間帯を避けた勤務時間の変更など甘ったれたことも言ってもらえないので順応するしかないのだが、生活リズム感ゼロの安藤にとって時間のズレって非常にこたえる。せかせかと働くのは好まない。けれどそうやって何年も毎日働いている。

環境を整えるために必要なことを少し賢気に考えているから島への1歩が踏み出せないのか。そんな自分を悲しく思う。

心が豊かになるなら収入の少しくらい減ったってとは簡単に割り切れず、島で何をしたいかなんかより、ふらりとただ行って住み着いてしまおうかと時々空を見上げるのである。

やよみ亭 映画研究会
毎月15日
木登場日 10月15日
戸加所時 10月15日
銃資や十月十五日
な格よみ十五日
別亭日
カ年 午後七時開
ン齡午 七時開
バ問後 七時開
飲々 七時開
迎す。 開始

キャタピラー CATERPILLAR
主演 島島 しのぶ
監督 若松孝二
72-9188

★尾道市立美術館特別展★
「かわぐちかいじ展」 10/1~11/27
お問い合わせ 0848-23-2281